

令和5年度 長野県南信工科短期大学 事業計画・評価表

長野県南信工科短期大学

目標	大項目 (VISION)	事業計画		具体的取組		実 績	分 析	外部評価委員会評価		委員コメント	令和6年度課題 (取組)	
		小項目 (取組)	評価項目	本年度 (令和5年度) の主な取組 (注) 赤字は新規の取組								
教育	社会に期待される人材教育	・ 予定した授業の実施 ・ 専門的知識の修得状況 ・ 実践力の向上		○地域企業の課題をテーマとした卒業研究及び共同教育の実施。 ○VR技術や生成AI、産業用ロボットに関する授業の検討。 ○10月に新しく導入された協働ロボットを使用した実習の検討。	○生成AIを活用した未来のサービスについて発表資料を作成する授業を実施。 ○協働ロボットの活用方法を積極的に提案できる人材育成のため、ロボット実習を実施。 ○地域企業の課題をテーマとした「デジタルモールド粉末冶金」等の卒業研究を実施。	○生成AIについては、後期の授業で実施生成AIの使い方、注意点、可能性と限界について学んだ。 ○協働ロボット実習は重要課題であるため、さらに充実する必要がある。		外部評価委員会評価	a	○実践的な能力向上のための機器の整備及び実習の追加などを検討しており、成果が期待されます。 ○3DカメラやAI等の周辺機器の活用やNC工作機械との連携など、協働ロボットの実習の充実化を検討する。 ○「デジタルモールド粉末冶金」や「歩行補助装置」の地域企業の課題に係る卒業研究を引き続き実施する。 ○学生の授業受講機会を増やすため、選択科目(線形代数学・工業数学・力学)を全学生対象のオンデマンド授業とする。		
				学校生活の充実	・ 予定した取組の実施状況 ・ 学生満足度	○地元自治体運営の循環バス停留所の設置 (もしくは停留所名称の追加変更) の働きかけ。 ○信州豊南短大との学術連携協定締結による学生間交流の促進。(信州豊南短大文化祭への学生参加) ○自治体の奨学金制度新設の働きかけ。(1団体以上)	○自治体運営のバス路線のバス停に校名表示の要望活動を実施。 ○信州豊南短大と連携協定締結 (R5.5.24) ○信州豊南短大学園祭では、学生間交流を図り、当日 (10/22) 有志5名の学生が作品を出展した。 ○2自治体において、制度新設の相談を始めた。	○バス停への校名表示について、自治体は路線バス全体の見直しを行っている。ペンディングとなっている。検討状況を注視していく。 ○信州豊南短大の文化祭準備では、学生同士が交流を図り、連携を実践した。 ○引き続き継続的に自治体に奨学金制度新設を働きかけていく。	自己評価: b 小項目評価: a	a	○バス停への校名表示など、外部要因の大きい取組は地道に取り組みしかないと見直しを行っている。ペンディングとなっている。検討状況を注視していく。 ○他校との交流は学生の成長にとって大切なことであり、今後も継続して行われる。 ○校内での学生のあいさつが以前より元気なのが気になる。	○バス停への校名表示について、関係自治体の路線バス全体の見直しの検討状況を注視し、状況に応じて働きかけを継続する。 ○信州豊南短大文化祭等における学生間交流を引き続き支援していく。 ○信州豊南短大から日本語表現の講師派遣を受け、就職に必要なスキル向上を図る。 ○大芝イルミネーションフェスティバルへの出展を検討する。(1作品以上)
				学生の就職支援	・ リクルート支援 学生へのアンケート、就職率	○相談・支援の充実 ○南信工科短大振興会への入会の促進。	○入会企業数: 210社 (2月) → 230社 (4月10日現在) 20社増 うち11社が上伊那以外の企業 ○校内企業研究会 (合同企業説明会) に100社が参加。例年より回数を増やして実施。(3→4回) ○就職希望者27名中26名が内定 (3月末現在)	○アンケートで、履歴書の事前添削の有効性について、5段階評価で、5が15名、4が6名、3が4名であり、全般的に高評価であった。 ○学校見学会に訪れた企業等に対して、振興会の活動を積極的に紹介するなどしてきた結果と思われる。	自己評価: b 小項目評価: a	s	○地元企業への就職率の高さは、大変評価できる。 ○就職支援に関する教職員の活動は高く評価できる。 ○企業研究会に100社の参加は驚きである。履歴書添削など丁寧に対応されている。時間を要するが継続してご指導されたい。	○「日本語表現」の授業で、履歴書の事前添削を行い、就職活動の充実を図る。 ○企業の採用意欲が強く校内企業研究会やインターンシップ説明会に多数の企業が参加する傾向にあるため、有効な実施方法を検討する。 ○デジタルツールも併用し、学生に企業情報を効率的に届ける方法を検討する。
	4年制大学への編入学制度の確立	・ 編入学試験に係る募集制度等の整備	○大学側の編入学試験募集要項の出願資格に本校の卒業生 (卒業見込みを含む) を明記。(2大学) ○単位互換制度 (もしくは科目等履修生における受講料等の非徴収) の整備。 ○本校の人文科学分野一般教科目及び専門基礎科目の充実。(4科目を新たに追加)	○信州大学と諏訪東京理科大学の令和5年度編入学試験募集要項の出願資格に本校卒業生 (見込み含む。) が明記された。 ○人文科学「日本語表現」、専門基礎科目「線形代数学」「力学」「工業数学」を第4期に開講。 ○3名が後期に開講された信州大学オンライン講	○編入学の学科試験の難度が高く、本校教育の延長線上では到達できないレベルにある。特別な強化が必要になれば、教員側の負担が増える可能性が高い。 ○職能短大の標準カリキュラムには教養科目が少ないため、4年制大学への3学年に編入できたとしても、卒業までには実質的に3年間に要する。	自己評価: b 小項目評価: a	a	○複数の学生が編入学へトライしたこと自体が評価されます。そのためのサポート体制整備の更なる充実が望まれる。 ○編入学の選択肢が増えた意義は大きい。 ○編入学のハードルは高いが、今後どう実現するかも重要課題とされた。	○教養科目の更なる充実を検討する。 ○編入学希望者については、引き続き信州大学オンライン講座を受講させる。 ○選択科目3科目は編入学希望者のみならず、全員が受講可能にするため、オンデマンド授業として開講する。(再掲) ○編入学合格者のフォローを編入先大学の教員と協力して実施する。			
	研究	研究の推進	・ 研究取組数 ・ 研究活動の内容 ・ 共同研究実施件数	○学会発表や学術専門誌への投稿数の増加 (原著論文発表数: 年間3報以上) ○地域企業や教育機関との共同研究の推進。(3テーマ) ○論文作成と投稿の支援 (論文出版費及び学会参加費の補助) ○信州豊南短大との学術連携協定締結による共同研究の推進	○令和5年度国際専門誌2、国際口頭発表1、国内口頭発表4。 ○国際専門誌「small」に掲載された研究成果についてプレス会見を開催。NHKはじめ、多くのメディアで報道された。 ○研究機関としてのひとつの基準である学術専門誌への原著論文の年間発表数3をクリアするのため、論文作	自己評価: b 小項目評価: a	s	○学術雑誌への掲載に係る積極的な取組みは素晴らしい。更なる増加には、他機関との連携による共著論文の増加を期待する。 ○学会への論文投稿や共同研究を多数実施され、成果が出ている。 ○研究活動が更に活発になることを期待する。 ○短い就学期間でも、学生の研究意欲が感じられる。	○飯田短大と咀嚼機能向上に関する共同研究 (「おしゃべりカミンちゃん」の共同開発) を開始する。 ○教員それぞれが保有する技術を、地域企業に展開できるようにするため、HPに教員紹介ページに加えて「記事」のアーカイブページを開発する。 ○原著論文の年間発表数3をクリアするため、論文作成支援策 (研究費・論文添削費・共同研究紹介等) を充実する。			
			SDGs 達成に向けた取組	・ 達成に向けた取組及び目標設定	○SDGs関連授業 (小水力発電等の自然エネルギー関連ほか) の実施。(3回) ○研究テーマの設定と実施。(1テーマ以上)	○栗田氏の再生可能エネルギーに関する授業を3回実施した。 ○大芝高原内の小川の落差を利用し、栗田氏考案の発電機で発電実験を行うための電子回路を設計&実装し、有意義な実験データを得た。	自己評価: b 小項目評価: b	b	○環境に配慮した研究を進められた。 ○他の取組との関連性もある課題であり、本項目を独立して評価するのは難しい。他の研究や取組をSDGsの何に該当するかを表してもよいのでは。	○SDGs関連事業を継続実施する。(3回以上) ○大芝高原における小水力発電実験装置の常設について、栗田氏を側面支援するため自治体との検討に入る。		
		地域社会への貢献	・ 地域イベント数 参加者アンケート内容	○技術相談 (連携協定締結機関からの紹介を含む) の充実。(3件以上) ○地域プロジェクトへの参加。(2件)	○伊那市からの委託により市内企業向けIoTハンズオンセミナー (4回) の講師を担当。 ○県内企業3社からの要請により、それぞれ6回、7回、5回の現地技術講座を実施。 ○上伊那産業振興会が伊那市から委託されているアスパラガス自動刈取機開発及び市内企業のスマート工場化に参画している。	自己評価: b 小項目評価: a	a	○地域の課題の研究に、地域企業を巻き込むことで、この地域になくてはならない学校になっていくと思われる。 ○2つの地域プロジェクトの1つ、アスパラガス自動刈取機開発では本校教員が技術リーダーとなり、民間企業4社を統括して開発を進めている。これらを通して、地域企業のレベルアップに貢献していく。	○アスパラガス自動刈取機の研究は次の段階である社会実装を目指して開発を継続する。 ○伊那市主催のIoTツール実習セミナーを通じて、スマート化企業の創出を支援する。 ○振興会企業への画像処理検査に関する技術支援 (もしくは共同研究) の検討に入る。			
	地域貢献	地域社会への貢献	・ 地域イベント数 参加者アンケート内容	○科学ふれあいフェアの開催。(1回) ○小学生・中学校専門クラブ体験講座等の実施。(3回) ○高大連携 (インターンシップ受入) の実施。(1回以上)	○科学ふれあいフェアは10月14日 (土) 開催、近隣17小学校から保護者を含め529名が参加した。 ○体験講座等は夏休み期間中に3回、秋に1回、合計4回実施。 ○インターンシップは、駒ヶ根工業高校2年生13名を対象に3日間実施。	自己評価: b 小項目評価: a	a	○地域との連携には、手間暇がかかりますが、レジュメアップには本も効果的であると思います。すぐに効果が出るかは確信できないと思いますが、継続することで成果につながるものと期待する。 ○Sに近しい評価ができる。地域貢献としての成果も出ている。 ○次世代を担う児童・生徒を対象とした幅広い年齢層へのものづくりの楽しさの理解促進を継続されたい。	○科学ふれあいフェアを開催する。(1回) ○公民館活動 (古文書デジタル化、公民館講座開催 (2件以上)) を支援する。 ○中学生向け「デジタルマスター講座」(ドローン・ロボットプログラミング講座) を実施する。 ○伊那小の総合的学習へのアドバンス協力を実施する。 ○インターンシップ受入れを実施する (3日間×2高校)。 ○伊那市中学校キャリアフェスティバルに参加する。			
			学校の魅力発信 (広報活動)	・ 認知度向上 見学会、オープンキャンパス等への参加者数 ・ メディア露出度 HP等アクセス数 他教育機関との連携交流	○教職員による高校訪問、高校教員及び生徒の本校見学会を継続実施。(5回以上) ○オープンキャンパスは、7月下旬開催予定の3年生対象の第2回目を、体験授業充実のため学科ごとに2日間に分けて土日開催。(年間計5回) ○これらに加えて、上伊那地域の受験生 (合格者) 確保のため、教員同士の校内見学会と相互の授業参観、個別オープンキャンパス、インターンシップによる強化対策を実施。(3回)	○教職員による訪問校総数は、中南信地域を中心に26校45回。 ○オープンキャンパスは計5回実施、生徒97人、保護者71人が参加した。 ○強化対策 ・ 駒ヶ根工業高校: インターンシップに3年生16名と2年生20名が参加。 ・ 上伊那農業高校: 本校教員2名が訪問し、グローバルコース発表会に参加。 ・ 赤穂高校: 本校教員が訪問し、今後の連携について相談。	自己評価: b 小項目評価: a	a	○広報活動はかなりの努力を感じる。 ○教員の教育業務外での取組は、外部からは見えにくいですが、苦勞をされていると感じられる。 ○今後は、一部への情報発信と共に、学校に直接足を運んでいただき、見学会や教員と直接触れ合う機会を増やすことが重要と思われる。 ○高校生に対して、多くの日程を制し、様々な機会を提供いただき感謝する。保護者へのアプローチを、いっどのように行っていくかが課題だと思われる。	○高校訪問の充実 中南信地域を中心に高校ごとにタイミング (三者懇談、オープンキャンパスや出願期の時期) と説明内容を再検討し対応していく。 ○オープンキャンパスの充実 在校生の協力 (当日の説明・案内、後援への働きかけ) を得る。また、1日を午前午後に分けて学科ごとに同日開催を検討する。 ○強化対策 工業系高校: インターンシップを更に横展開して実施する。 普通科高校: 進路指導・担任教諭の校内見学会の実施を新規開拓する。 農業系高校: 進路指導・担任教諭の校内見学会の実施を新規開拓する。		
		受験者増及び入学定員の充足 (下記に掲げた全ての取組)	・ 受験者数及び入学定員充足率	○取組ごとの発信の効果の分析とPDCAの実施。 ○科学ふれあいフェアでのデザインコンクールの継続。 ○研究成果、活動状況などの積極的な広報。 ○伊那弥生ヶ丘高校1年生の探究の授業に協力。 ○他の教育機関等と連携した学校のPR活動の共同開催の構築。 ○信州豊南短大との学術連携協定の締結。	○デザインコンクールには9校、321名の応募があり、フェアのイベントとして表彰式を開催した。 ○伊那弥生ヶ丘高校探究の授業で、南信工科短大の魅力と同校の生徒に伝える授業に協力した。 ○学校見学会は、金融機関、重点高校、飯田産業センターなどと実施し、意見交換を行った。(16回、312人) ○飯田短大との連携を模索するため、相互に学校見学会を行い、意見交換を行った。	自己評価: b 小項目評価: a	c	○短期での成果は出ていくと思いますが、地道な努力が必要かと思えます。また、地だけでなく、近隣地域にもPRをすることが必要です。そのために学生寮の整備は必須です。 ○人口減少の中で受験者数の減はやむを得ない部分もある。少数精鋭で優秀な学生を輩出し続けることが学校の高評価に繋がる。 ○高校訪問や諏訪工業フェスの参加などを通じて、知名度向上を図り、多くの学生が集まる学校になって欲しい。	○強化対策 (再掲) 工業系高校: インターンシップを横展開して実施する。 普通科高校: 教員 (進路指導・担任教諭) の校内見学会実施を新規開拓する。 農業系高校: 教員 (進路指導・担任教諭) の校内見学会実施を新規開拓する。 ○より効果的な取組を検討するため、高校別や試験区分別等、過去の受験状況を科学的に分析する。 ○編入学試験の合格実績を志願者確保に結び付ける方策を検討、実施する。			
校内の学習環境の整備	・ 外観の変化 (植栽実施、敷地内の整備状況)	○正面入口付近を中心とした植栽の実施及び日常的な整備。(コニファー約50本、利休梅2本)	○9月に植栽完了 (コニファー49本、利休梅2本)。(南信工科短大振興会による支援)	自己評価: b 小項目評価: b	b	○学校正門付近の視認性の向上の検討。(正門付近の構造や看板設置など) ○校内の植栽 (特に高木) の剪定等により、景観の向上及び学習環境の整備に努める。						
南信工科短期大学校ビジョンの策定	・ 内容の明確化と周知	○ディプロマ、カリキュラム、アドミッションポリシー及びビジョンの校内での共有。 ○保護者に対する周知 (後援会総会等)、振興会会員企業への周知やHP等での公開。	○6月20日の後援会において保護者に説明するとともに、全保護者に郵送の上周知を図った。 ○運営協議会の意見を反映し、正式に策定、ホームページで公表済み。	自己評価: b 小項目評価: b	b	○職員の共通認識のもと学校のますますの発展を望む。 ○ビジョンの明確化はされている。	完了済					
学校運営	学校の魅力発信 (広報活動)	・ 認知度向上 見学会、オープンキャンパス等への参加者数 ・ メディア露出度 HP等アクセス数 他教育機関との連携交流	○取組ごとの発信の効果の分析とPDCAの実施。 ○科学ふれあいフェアでのデザインコンクールの継続。 ○研究成果、活動状況などの積極的な広報。 ○伊那弥生ヶ丘高校1年生の探究の授業に協力。	○デザインコンクールには9校、321名の応募があり、フェアのイベントとして表彰式を開催した。 ○伊那弥生ヶ丘高校探究の授業で、南信工科短大の魅力と同校の生徒に伝える授業に協力した。	自己評価: b 小項目評価: a	a	○広報担当が令和5年度は3名に減員になったため、新たな広報活動はできず、現状の活動に留まった。 ○HPによる教員紹介は、地域企業と本校の接点拡大に寄与すると思われる。	○委員会メンバーを刷新し、全員で広報活動に当たり、新たな取組の導入もできるような検討する。 ○HPとSNS (Instagram・ユーチューブ) の検索回数状況と分析し掲載内容を検討する。				
			・ 認知度向上 見学会、オープンキャンパス等への参加者数	○他の教育機関等と連携した学校のPR活動の共同開催の構築。 ○信州豊南短大との学術連携協定の締結。	○学校見学会は、金融機関、重点高校、飯田産業センターなどと実施し、意見交換を行った。(16回、312人) ○飯田短大との連携を模索するため、相互に学校見学会を行い、意見交換を行った。	自己評価: b 小項目評価: a	a	○学生自身が自ら発信して、南信短大をアピールする、又は卒業生による発信を考られた。 ○地域の高校や協定を結んだ他の教育機関等と連携した学校のPR活動と新たな取組の検討を行う。 ○飯田短大等新たな連携協定の構築と協定に基づく取組のPRにより知名度向上を図る。				
			・ 受験者数及び入学定員充足率	○A0及び校長推薦の定数を検討する。 ○上伊那地域の受験生 (合格者) 確保のため、管内の高校について、教員同士の校内見学会と相互の授業参観、個別学校説明会、インターンシップ等を実施する。(3回) ○諏訪・中信地区の応募者確保のため「諏訪メッセージ」に参加しブース展示等を行う。	○令和5年度入試からA0と校長推薦枠の合計を14名とした。 ○令和5年度の上伊那地域の受験者数及び入学希望者の状況 ・ A0入試、校長推薦、事業主推薦、一般入試など計6回入試を行った。 ・ 受験者数合計: 48人 (25+23)、入学者: 38人 (19+19)	○一般入試については前中後期あわせても8名と例年の半数と激減した。この原因は南信の普通科高校では理工系進学希望の高校3年生がかなり減少したためと推測される。また、中信の工業高校では就職希望の生徒が多く進学希望者が減となった。 ○強化対策 高校の先生を介して行うため、浸透していくのに時間を要する。	自己評価: c 小項目評価: C	C	○強化対策 (再掲) 工業系高校: インターンシップを横展開して実施する。 普通科高校: 教員 (進路指導・担任教諭) の校内見学会実施を新規開拓する。 農業系高校: 教員 (進路指導・担任教諭) の校内見学会実施を新規開拓する。 ○より効果的な取組を検討するため、高校別や試験区分別等、過去の受験状況を科学的に分析する。 ○編入学試験の合格実績を志願者確保に結び付ける方策を検討、実施する。			
				自己評価: c	小項目評価: C							

(評価基準)  
小項目 (取組単位評価) s: 事業計画を大幅に上回る a: 事業計画を上回る b: 事業計画を実施 c: 事業計画はやや遅れている d: 事業計画を十分に実施せず  
小項目 (評価項目単位評価) s: 事業計画を大幅に上回る a: 事業計画を上回る b: 事業計画を概ね達成 c: 事業計画を下回る d: 事業計画を大幅に下回る  
大項目評価 S: 事業計画の進捗は優れて順調 A: 事業計画の進捗は上回って順調 B: 事業計画の進捗は順調 C: 事業計画の進捗はやや遅れている D: 事業計画の進捗は遅れている